（第3種郵便物認可）　日刊工業新聞　Business & Technolo

新興セルビック―新潟・燕会議所

産産連携 動き加速

モノづくりの〝芽〟育成

通信手段の発達に伴い中小製造業の間で地域を越えた産産連携への動きが目立ってきた。新興セルビック（東京都品川区、竹内宏社長、03・3785・7800）もその1社で、コーディネーターの仲介により新潟県燕商工会議所産業経済委員会と交流の機会を得た。竹内社長と新潟県の中小メンバーらはこれを糸口に地域を越えた産産連携を実らせたい考えだ。キーワードは〝動いてくれる調整役との出会い〟。産産連携に取り組む中小企業の取り組みを追った。

（大塚久美）

自社製品比率85％

東京都内の金型製造会社はこの20年間で3分の2が倒産・廃業に追い込まれている。従来通りの受注先の仕事だけでは生き残れないのが現状だ。その中で、金型で培った技術の応用などにより自社製品比率が85％に達する中小製造業がある。それが新興セルビックだ。

同社は05年8月に「経済産業省第一回ものづくり日本大賞」で経済産業大臣賞を受賞した。受賞品は小型射出成形機「0610―C，Mobile」。プラスチック廃材ゼロの省エネ・省スペースで済むのが特徴だ。現在までに海外を含め、約60台を販売した。

9月末、燕商工会議所産業経済委員会が視察研修で訪れた。竹内宏新興セルビック社長の経営理念や哲学を聞くためだ。意見交換会で竹内社長は「大手電機メーカーでは付加価値がどれほど重要かを説いた。

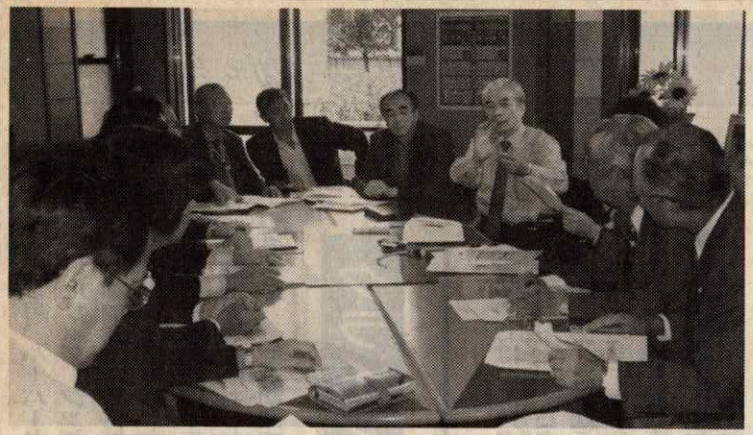
個人的熱意で

今回の視察研修は広域関東圏産業活性化センター（東京都港区）の高橋伸一郎常務理事が個人的に調整役を買って出たことで実現した。「知る場をいかにつくるか。昔と同じでは生き残っていけない」と中小企業に意識を持ってもらうことが大事」と、高橋常務理事は言う。調整役を買って出た理由は地方や都内を問わず、産産連携の重要性に中小企業が目覚めることを期待してのことだ。

今回の視察研修は産産連携への小さな一歩に過ぎない。今回の参加メンバーらは連携の〝実〟を目指して、08年1月に同じ新潟県の三条商工会議所と新潟県県央地域地場産業振興センターも入れ3者共催で「燕三条地域ものづくり研修会」（仮称）を開く準備を始めた。今度は竹内社長を新潟県に講師として招き、意見交換を行う予定だ。

目利きも必要

全国各地には商工会議所をはじめ、産業活性化協議会など商工団体や組織がある。だが実際は産産や産学、産学官連携のコーディネート機能がうまく働くケースは少ない。多くの中小企業が、優れた技術などのタネを持ちながら、芽が出ず埋もれたままでいる。連携はそうした状況をうち破る一つの有効な手段だが、地域を越えた広域的な産産連携、地域活性化はとりわけ中小企業主の熱意と、真にコーディネート機能を果たす組織があってこそだ。中小企業主は腹を割った付き合いができる人を見つけ出す目利きも必要といえる。



県外視察研修で新興セルビックを訪れた新潟県燕商工会議所産業経済委員会のメンバー。竹内新興セルビック社長（正面、ワイシャツ姿）を中心に建設的な意見交換が行われた

首都圏リポート☆Report

〝動いてくれる〟調整役がカギ

広域連携メモ

経済産業省が中小企業の連携を後押しする新制度「新連携」を始めたのが05年4月。認定事例件数が9月末時点までの累計で374件あるうち、連携が複数地域にまたがるものは6割強の234件を占める。

「制度開始以降、エリアを越えた連携が増えている傾向にあるようだ」と中小企業庁創業連携推進課。インターネットを使って連携先を探す意欲的企業もある。ネットやメールなどの連絡手段の発達が遠方であっても有力な連携先を知る手段となり、地域を越えた連携を促していると見られる。